

第一章..騎士王の休息と、湯煙の予感

「戦士の休息、あるいは腹ペコ王の期待

冬の寒さが厳しさを増す山間の温泉街。

第五次聖杯戦争という過酷な運命の闘争の合間に訪れた、奇跡のような休息の時間だった。俺とサーヴァント・セイバーは、情緒あふれる高級旅館の前に立っていた。

「ここが、本日の拠点(ベース)ということでしょうか？」

凜とした声が冷たい空気に響く。

私服姿のセイバーが、目の前の旅館を敵の城塞を見定めるかのように真剣に見上げていた。

「ああ、そうだよセイバー。今日は戦いもしばしの休みだ。骨休めに温泉でもどうかって話、したたる？」

「はい。そう仰るなら、私は従うまでです。それに……」

セイバーは少し言い淀み、夕食の仕込みであるう出汁（だし）の香りへ視線を向けた。

「日本の『オンセン』には、その土地特有の素晴らしい食事が振る舞われると聞き及んでいます。魔力の供給不足を補うためにも、万全の態勢で挑まなければなりませんから」

「……また食べる気満々だな」

「なっ、誤解しないでください！ あくまで、サーヴァントとしてのコンディション維持の話です。決して私が、ここの名物である特選和牛の懷石料理を楽しみにしているとか、そういう個人的な欲求ではありません」

早口で言い訳をする彼女の頬は、寒さのせいだけでなく、ほんのりと朱に染まっている。俺は口元を緩めた。このギャップこそが、俺のサーヴァントの最大の魅力なのだ。

「はいはい、分かっているよ。料理も期待しているけれど、まずは部屋に入るうか」

「……む。私の話を流しましたね？」

少し不満げに唇を尖らせるセイバーの手を取り、俺たちは旅館の暖簾をくぐった。
通されたのは離れの客室。窓の外には雪化粧をした日本庭園が広がり、穏やかな時間が
流れている。

荷物を置き、座卓に向かい合って座る。

女将がお茶と茶菓子を出して下がると、セイバーはすぐさま温泉まんじゅうに視線を固
定した。

「いただいても？」

「どうぞ。セイバーの分だ」

「感謝します」

小さな口でぱくりと頬張ると、翡翠の瞳がばあつと輝いた。

「……美味です。上品な甘さが、疲れた身体に染み渡るようです」



「そりゃよかった。夕飯まではまだ時間があるし、ゆっくりしよう」
「はい」

満げに微笑む彼女を見ると、俺の胸の奥がきゅっと締め付けられるような感覚に襲われた。

俺は無意識に、テーブルの上に置かれた彼女の手に、自分の手を重ねていた。

「……………」

セイバーが驚いたように目を丸くする。

そして少し躊躇いながらも、俺の手を握り返してくれた。

「いや……………本当に、来てよかったなと思って」

「……………そうですね。こうして穏やかな時間を過ごせること、私も……………嬉しく思います」

セイバーは照れくさそうに視線を逸らし、しかし指先だけは強く絡めてくる。その仕草

だけで、今の俺には十分すぎるほどの幸福だった。

「鎧を脱いだ王、浴衣への変身

「さて、それじゃあ早速温泉に行こうかと思うんだけど、その前に着替えようか。浴衣があるし」

「ユカタ、ですか。知識にはありますが、実際に身につけるのは初めてです」

浴衣を手に取り、珍しそうに広げるセイバー。

「着方は分かるか？」

「ええ、構造は単純なようですので問題ありません。……ですが、この下着はどうすればよいのでしょうか？ やはり、外すべきなのでしょうか」

「い、いや！ そのままでいい！ というか、着ててくれ！」

「そうですか？ 承知しました。では、失礼して」



俺は慌てて背を向け、窓の外を眺めるふりをした。

背後から、衣擦れの音が聞こえてくる。想像するな、と言いつても、脳裏には彼女の白磁のような肌が浮かんでしまう。

「……着替え終わりました」

俺はゆっくりと振り返る。

「——どう、でしょうか。似合っていますか？」

藍色の浴衣を纏ったセイバーが、恥ずかしそうに袖をいじりながら立っていた。

そして何より——。

浴衣の帯によって締め上げられ、強調された胸元。その豊満さはアンバランスなほどだ。薄い浴衣の生地越しても、その重量感と柔らかさが伝わってくる。

「……っ」



「？ あの、どこを見ているのですか？」

「あ、いや……ごめん。あまりにも綺麗だったから、見惚れてた」

「き、綺麗だなんて……口が上手いですね」

セイバーはカッと顔を赤くし、胸元を隠すように腕を上げた。だが、その動作が柔らかな形を強調する結果になってしまっている。

「似合ってるよ、本当に。いつものセイバーもいいけど、そういう格好だと……なんだか、普通の女の子みたいでドキドキする」

「ふ、普通の女の子、ですか……」

彼女は少し俯き、嬉しそうに、そして少し寂しそうに呟いた。

「私は王として育てられ、剣として生きてきました。ですから、『女の子らしい』という評価には慣れていません。……ですが、そう言っていたら、悪い気はしませんね」

「セイバー……」



「むしろ、胸が……高鳴るのを感じます」

彼女は一步、俺に近づいてきた。

俺の胸に触れるか触れないかの距離にある。

「帯が、少し苦しいのです」

「えっ？」

「慣れない服装のせいでしょうか。それとも、この視線を感じて、鼓動が早くなっているせいでしょうか……直して、いただけますか？ 少し緩めていただければ」

「あ、ああ。分かった」

俺は震える手を伸ばし、彼女の腰に回された帯に触れた。

吐息が掛かる距離。

俺たちはこれから温泉に向かうはずだ。だが、この部屋の空気はすでに、湯気よりも熱く、甘いものに変わりつつあった。



∞ 廊下の静寂、触れ合う指先

なんとか帯を調整し、俺たちはようやく部屋を出た。

長い廊下を、大浴場に向かって歩く。他のお客の姿は見えない。静寂だけが二人を包んでいる。

「セイバー」

「はい、なんでしよう」

「こっちに来ないか？ 隣に」

「……ですが、主の進路を塞ぐわけには」

「今はマスターとサーヴァントじゃなくて、……その、恋人同士の旅行みたいなものだから」

顔から火が出るかと思った。

セイバーはふわりと、花が咲くように微笑んだ。



「――承知しました」

彼女はトトツ、と小走りて俺の隣に並ぶ。

そして、遠慮がちに、俺の浴衣の袖をきゅっと掴んだ。

「手は……まだ、恥ずかしいので。これで許してください」

「……ああ、十分だ」

袖越しに伝わる彼女の体温。

時折、歩調が合うたびに、彼女の柔らかな胸の膨らみが俺の腕に触れる。その度に、心が跳ね上がる。

セイバーは真っ赤な顔で、しかし逃げずに俺を真っ直ぐに見つめ返してくる。

「ん？」

「……背中、流しましょうか？」



蚊の鳴くような声で、とんでもない提案が投げかけられる。

彼女の瞳には、騎士としての決意にも似た、しかもっと熱っぽい光が宿っていた。

「それは……期待していいのか？」

「はい。剣として、身体（からだ）を清めるのもまた、務め……いえ、私がそうしたいのです」

俺の喉がごくりと鳴った。

今夜がただの休息で終わらないことだけは、確実だった。

第10章：白濁の湯と、重なる肌の熱

一：雪見の秘湯、二人きりの世界

貸切露天風呂は、岩で組まれた湯船から白濁した湯が滔々（とうとう）と溢れ出してい

た。

脱衣所から、セイバーの声が聞こえる。

「……先に入っていてくださいませんか？ その、少し……心の準備が」

俺は一足先に露天風呂へと足を踏み入れる。極上の温かさが全身を包み込んだ。ざぶりと湯が揺れる音だけが響く静寂。

「……お待ちせしました」

ゆっくりと振り返る。

湯気の向こう、月明かりに照らされたその姿に、俺の思考は完全に停止した。

騎士王の、ありのままの姿。白磁のように透き通る肌が、寒さと羞恥でほんのりと桜色に染まっている。

そして、歩いたたびに、重力に従ってたつぷんと揺れる、二つの巨大な果実。



「見過ぎですよ。……ふふっ」

セイバーは楽しげに艶（つや）やかな笑みを浮かべた。

湯船の縁に腰掛け、足先でお湯をちやぶちやぶと遊ばせる。

「戦闘時、この胸は正直に言えば邪魔でしかありません。ですが……今は、悪くないと思っています。いえ、むしろ気に入っていると書いてもいいかもしれません」

「え……？」

「だって。この人が私のここを見る時……とても、雄（オス）の目をなさるから」

挑発的な言葉。

セイバーは、とぶん、と湯船に入ってきた。その豊かな双丘だけは浮力で持ち上がり、水面から半分ほど顔を出している。

「どうですか？ 私の身体、この人を満足させられるでしょうか？」

「あ、当たり前だろ……！ すごすぎるよ、セイバー」

「ふふ、嬉しい……。そう言って欲しくて、手入れを怠らなかつた甲斐があります」

彼女は俺の隣に並ぶと、濡れた肌を遠慮なく俺の腕に密着させた。

じゅわつ、と熱が伝わる。腕に押し付けられる圧倒的な弾力に、脳が蕩（とろ）けそうだ。

♪ 泡沫（うたかた）の夢、背中への口づけ

「さて……。約束通り、背中をお流ししますね」

セイバーが身を乗り出した。俺は言われるがままに背中を向ける。

彼女の手のひらが、俺の背中に触れた。スポンジやタオルではない。素手だ。

石鹸の泡を含んだ手が、滑るように背筋を撫で下ろす。

「背中……。広くて、温かいです」

「セイバーの手も、気持ちいいよ」

「っ……。ん、ありがとうございます……」



耳元で、彼女の甘い吐息がかかる。

背中を洗う手つきは次第に熱を帯び、愛撫へと変わっていくようだった。肩甲骨のあたりを円を描くように撫でられ、俺は思わず声を漏らす。

「そこ……っ」

「ここが凝っているのですか？ ……ふふ、では特別に、マッサージを」

ニユルツ、という湿った音と共に、背中に何かが押し当てられた。

——胸だ。

彼女は俺の背中に抱きつき、その豊かな胸を押し付けて、石鹸の泡を利用して滑らせているのだ。

「せ、セイバ！？ これっ」

「じっとしててください……んっ、はあ……っ」



彼女の口から、艶めかしい声が漏れる。乳房で背中を洗うという行為は、彼女自身にも快感を与えているようだった。

「私の……んっ、誇り高き……ふう、武器の味は……どう、ですか……？」

「最高……だよ……っ」

「あ……っ、嬉しい……もつと……」

彼女はさらに強く抱きついてきた。首筋に熱い唇が触れる。ちゅ、と吸い付くような音がして、首筋に甘い痺れが走った。

ω 湯の中で絡み合う熱情

俺は勢いよく振り返り、背中の彼女を正面から抱きしめた。

バシヤアツ！ と激しくお湯が跳ねる。

「きゃっ……！！？」



驚いて目を丸くするセイバー。その瞳は潤み、頬は湯あたりしたかのように真っ赤だ。

「もう、我慢できない」

「……はい。私も……触れられるのを、待っていました」

セイバーは抵抗することなく、俺の首に腕を回してきた。

湯の中で、互いの素肌が密着する。下腹部同士が触れ合い、彼女の柔らかな太ももが俺の腰に絡みつく。

「あ……っ、硬い……」

「ごめん、セイバーのせいだよ」

「ふふ……光栄です。私の魅力で、こんなにしてしまえたなんて……」

彼女は自分から唇を寄せてきた。触れ合うだけの優しいキス。それが次第に深く、濃密なものへと変わっていく。

「んむ……っ、ちゅ……あ、んっ……」

セイバーの喉から、切なげな声が漏れる。

俺の手は、自然と彼女の最大の武器である胸へと伸びていた。
掌いっぱい広がる柔らかさ。

「あっ……！！　そこ、は……んあっ！」

「すごいな、本当に……手から溢れるよ」

「あ……っ、もつと……もつと乱暴にしても、構いません……。私はサーヴァント……。すべてを受け止める、盾なのですから……っ」

騎士としての矜持（きょうじ）と、女としての悦びが混ざり合った言葉。

彼女は自分の豊満な胸を俺の手に押し付け、さらに擦り寄せてくる。

「……好きです……」



潤んだ瞳で見つめられ、囁かれる愛の言葉。

湯気と熱気に包まれたこの場所で、俺たちの夜はまだ始まったばかりだった。

第〇章…布団の中の聖杯戦争、あるいは魔力供給の儀

一、湯上がりの静寂、乱れる呼吸

部屋に戻ると、すでに布団が敷かれていた。

温泉での「事」の余韻が、まだ肌に残っている。

セイバーは濡れた髪をタオルで拭きながら、上気した顔で布団の端に腰を下ろした。

「……髪、乾かしていただけますか？」

彼女は背中を向け、濡れた金糸を俺に預けてきた。

指先がうなじに触れるたび、セイバーの肩がビクリと跳ねる。

「……………んっ……………くすぐりたい、です……………」

「ごめん。でも、耳まで真っ赤だぞ」

「それは……………この手が、熱いからです……………いえ、私の身体が火照っているからでしようか」

ドライヤーの音が止むと、互いの荒い呼吸音だけが、鼓膜を打ち続けた。

セイバーがゆっくりと振り返る。その瞳は、愛を乞う乙女のように潤んでいた。

「魔力の供給が、必要ではありませんか？」

それは、甘美な誘い文句にしか聞こえなかった。

「……………ああ。必要だと思う。すごく」

「でしたら……………遠慮は無用です。私の全てで、受け入れますから」

彼女は自ら浴衣の帯に手をかけ、するりと解いた。



はらり、と布が落ちる。

露わになったのは、布団の上ではより一層背徳的に見える極上の肢体だった。

♪ 誇り高き双丘、愛おしい重量

セイバーはそのまま仰向けになり、シーツの上に身を投げ出した。

浴衣の前が大きく開き、その豊かな胸がこぼれ落ちる。

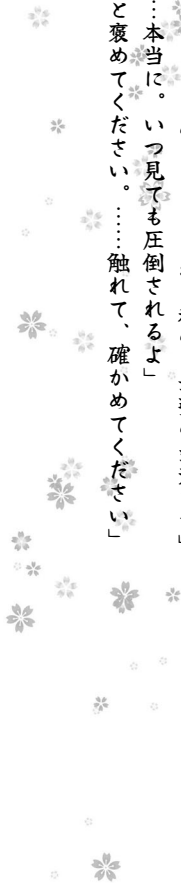
「見てください。……大好きな、私の胸です」

彼女は自分の手で、その大きな乳房を下から支え、持ち上げてみせた。

「戦場では機動力を削ぐだけの重り……そう思っていました。ですが、この人がこれほど熱い視線を送ってくださるのなら……これは私の、最強の武装です」

「すごいな……本当に。いつ見ても圧倒されるよ」

「ふふ、もっと褒めてください。……触れて、確かめてください」



誘われるまま、俺は彼女の上に覆いかかった。

両手を伸ばし、その溢れんばかりの果実を包み込む。手のひらでは収まりきらない重量感。

「あっ……んうっ！　っ！」

俺が指に力を込めるたび、セイバーの口から甘い悲鳴が漏れる。

「もっと……強く……っ。私の胸が、この人の形に変わるくらい……んああっ！」

「セイバー、ここ……すごく硬くなってる」

「い、言わないで……ください……っ。この人が触るから……私の身体、おかしくなっ……」

親指で先端を弾くと、彼女は背中を反らせて喘いだ。

騎士王が、今はただの快楽に溺れる一人の女として、俺の下で乱れている。



「はあ、はあ……っ。キスを……」

彼女が首をもたげ、唇を求めてくる。

俺は吸い寄せられるように唇を重ねた。

ω 繋がる舌、溶け合う魔力

触れた瞬間、火花が散るような感覚があった。

互いの唇を貪り、舌を絡ませる。ちゅぷ、ぬちや、と水音が部屋に響く。

「んむ……っ、ちゅ、る……あっ、んん……っ」

息継ぎの間も惜しいほどに、深く、濃密なキス。

彼女の腕が俺の首に絡みつぎ、身体を密着させてくる。

「ぶはっ………苦しい……でも、幸せです……」



唇を離すと、銀色の糸が二人の間を繋いだ。

「ねえ。……もう、我慢しなくていいんですよね？」

「……ああ。俺も、限界だ」

「ふふ……嬉しい。私の全てを……魔力の髄まで、吸い尽くしてください……」

彼女は俺の手を取り、導くように下腹部へと運んだ。そこはもう、期待と興奮で濡れそぼっている。

「ここも……待っていました。剣の鞘（さや）が、主（あるじ）の剣を待ちわびるように……」

俺はもう迷わなかった。

浴衣を完全にはだけさせ、彼女の白い肌を露わにする。

「来てください。私の中へ——」



その言葉を合図に、俺たちの夜は本当の意味で始まった。

第4章..騎士王の蜜と、果てなき補給路

一、事後の余韻と、再び疼く熱

セイバーは俺の胸に凭（もた）れかかり、小さな吐息を繰り返していた。シーツは汗と愛液で濡れており、部屋には甘く、淫靡な匂いが充満している。

「はあ……っ。私の……魔力の源が、空っぽになってしまっうほどに、濃密な時間でした」
「セイバーこそ、極限まで俺を満たしてくれた。ありがとう」

俺が彼女の汗で濡れた金色の髪を撫でると、セイバーは満足げに目を細めた。
俺が何気なく、彼女の豊かな胸に手を滑らせた、その瞬間。



「ひゃっ……！！ や、やめてください！ そこは……っ、ああ！」

セイバーの全身が激しく跳ね上がり、驚愕と快楽の入り混じった悲鳴が上がった。

「ごめん、そんなに敏感なのか？」

「ち、違います……っ！ 平常時であれば、何とも……っ、ないはず、なのに……っ。この交合（まじわり）によって、今は、全身の神経が……ここ、一点に集中しています……っ！」

俺が少し指で弾いてやると、セイバーは歯を食いしばり、必死に声を抑え込もうとする。

「ああ……っ！ だ、駄目です……っ！ それだけで……意識が飛びそうに……っ、ひゅうっ！」

「そうか。じゃあ、もっと深く意識を飛ばしてあげるよ」

「え……っ、!? 待っ……んんうっ！」

俺は彼女の胸の上に乗り上げ、その愛おしい武器の一つに顔を埋めた。

② 蜜を吸る、騎士王の絶叫

大きく開いた口で、乳輪ごと、硬くなった先端を深く啜え込んだ。

「ちゅ……っ！ んぐう……っ！ ああああああっ！ そこはあ……っ！」

熱い舌が、乳首の裏側を丹念に舐め上げる。

セイバーの身体はシーツの上で激しく痙攣し、腰が弓なりに反り返った。

「んんっ……ちゅ、ぶっ……う、やめ、て……っ。でも、もっど……っ、ひうっ！ ああ、頭が……っ、おかしく……っ」

「美味しいよ、セイバー。この人の味だ」

「っはあ……っ、ダメです……！！ 王の、誇りが……っ、ああ、もうどうにでも……っ！」

俺が勢いを増して吸い付くと、口の中に、甘く芳醇な液体が流れ込んできた。

「……っ！？ ああ……っ、まさか……！ い、いつの間に……っ、ま、魔力が……っ、溢れて……！」

その胸の先端からは、光を帯びた白い液体が、脈動するように滲み出ている。契約を深く結んだ者だけに許される、サーヴァントの魔力（いのち）の蜜。

「これが君の魔力か。……たまらないほどに甘い。力が湧いてくる」

「んんん……っ！ そうです……っ！ それは……私の、全て……っ！ ちゅ、ぶっ……っ、捧げます……っ！ 全部、吸い尽くして……っ！」

セイバーは半狂乱になり、俺の頭を両手で優しく掴み、乳房に押し付けた。

「ううっ……っ！ ちゅ、ぶ……っ。ああ、だめ……っ、頭が……っ。このままでは……生命（いのち）ごと……っ、吸い尽くされてしまう……っ！」



∞ 蜜の補給と、果てなき結合

俺は名残惜しくも、口を乳房から離した。

セイバーの顔は恍惚に歪み、途切れることのない喘ぎ声が部屋を満たす。

「はあ……っ、ひゅ……っ、どう、ですか……？ 私の、蜜は……っ、この人を、満たせました、か……？」

「ああ、最高の補給だ。君の魔力は、世界で一番甘い」

俺は、蜜で濡れた指で、彼女の胸全体を丁寧に撫で回した。

セイバーは全身の力が抜けきったように、ふにやりと崩れる。

「ああ……っ、この人が……私の全てを、知ってしまった……っ。もう……永遠（とわ）に、この人から……逃げられません……っ」

俺は、愛液でべっとなりと濡れそぼった彼女の下腹部へと手を伸ばす。



「この魔力を、君自身にも還してあげよう」

俺は、蜜をまとった指を、そのまま彼女の濡れた花卉に押し当て、熱い場所へゆっくりと潜り込ませた。ジユツ、という水音。

「ひああッ！ あ、熱い……っ！ 私の……蜜が、戻って……っ！ んんんんっ！」

乳首を揉みながら、指を動かす。

胸と秘所、二つの快感が同時に彼女の脳内を焼き尽くす。

「やめ……っ！ ああ、いい、きもちいいいっ……！！ 魔力、があふ……っ、ひっ！」

彼女の身体から、さらに強い魔力の奔流が噴き出す。

「……っ！ ……私は……この人のために……永遠に、この蜜を……っ、はあ……っ、出し

続け、ます……っ」

セイバーは完全に力を失い、俺の胸にしがみついていた。

頬には、安堵と快楽の雫が伝っている。

夜明けは近い。だが、この満たされた愛がある限り、俺たちの戦いは、きっと勝利へと繋がるだろう。

第4章..愛の剣、騎士王の聖域

一. 聖剣の鞘、主の挿入

指による甘美な戯れを終えた後、俺たちの間には、もはや言葉はいらなかった。セイバーは、愛液で濡れそぼった太腿を開き、俺をまっすぐに見つめている。

「さあ。愛の剣で……私を、貫いてください」



俺は、彼女の熱く濡れた聖域に、己の剣をゆっくりと合わせる。先端が触れただけで、セイバーは全身を震わせ、喉の奥から切なげな吐息を漏らした。

「ん……っ、ふう……っ。ああ、熱い……っ」

「セイバー……」

「大丈夫。私は……この人を受け入れるために、ここにいるのですから」

彼女は優しく、しかし確固とした力で俺の腰を引き寄せた。

ヌルリ、という湿った感触と共に、俺の全てが、彼女の奥へとゆっくりと沈み込んでいく。

「ああ……っ！ い、入る……っ！ 深い……っ！」

俺の存在の全てが彼女の中に飲み込まれた瞬間、セイバーは大きく息を呑み、シーツを掴んだ指先に力を込めた。



「こんなにも……この人の、存在を……近くに感じるの、初めてです……っ。私の……聖域に……っ、ふう……っ」

セイバーは恍惚の表情で、俺の胸板に顔を押し付けてきた。

∞：絶頂の連鎖、尽きることなき喘ぎ

互いの熱が限界に達していることを確認し、俺は動き始めた。

優しく、そして深く。魔力を交換するような、ゆっくりとした律動。

セイバーの口からは、途切れることのない甘い喘ぎ声が溢れ出す。

「はあ……っ、んっ、んんう……っ。ああ、そこ……っ！　そこです……っ！」

「気持ちいいか、セイバー？」

「きもち……っ、いい、です……っ！　その熱が……私の、核（コア）を……っ、じゅ、じゅわ……っ、溶かしていくように……っ！」



俺は動きを激しくした。スピードを上げ、深く、彼女の最も敏感な場所に突き当てる。バシッ、バシッと肌が打ち合う音。シートが擦れる音。そして、セイバーの絶叫が、狭い部屋に響き渡った。

「ああああああつ！ だめ……っ、はい、です……っ！ ひゅ、ううっ……っ！ いく……っ！ イって、しまう……っ！」

彼女は俺の背中に爪を立て、硬く引き締まった腹筋に顔を押し付ける。

「んんんんんんっ！！！」

セイバーの全身が激しく痙攣し、硬直する。俺の腰を締め付ける力があまりにも強く、俺も思わず声を漏らした。

「すごい締め付けだ……っ！ くそっ、最高だよセイバー！」

「ふう、ふう……っ。き、気持ち、よかった……っ。この充填（チャージ）は、十分でし

たか……？」

俺は彼女の汗で濡れた唇を深く塞ぐ。

「んむ……っ、ちゅ……っ！ 足りないに決まってるだろ、まだこれからだ！」

キスをしながら、俺は再び腰を突き上げた。

「きゃあ……っ！ ああ、まだ……っ、ダメ……っ、すぐに、また……っ、イかせて、しま
う……っ！」

∞ 永遠の誓い、聖域への到達

俺は彼女の喘ぎ声をすべて飲み込むように、唇を離さなかった。

深いキスと、激しい動きの同時進行。快感は口腔と肉体の両方から押し寄せ、セイバーの理性を完全に破壊する。



「ちゅ、ぶっ……ん、んんっ！ あああああああつ！」

二度目の、さらに強烈な絶頂がセイバーを襲う。その瞬間、俺もまた、理性の限界を超えた。

「セイバー……っ！ 愛してる……っ！ ここで……っ、ここでイかせてもらおうっ！」

俺は、彼女の中で何度も、何度も、激しい衝動を解き放った。

「ああ……っ、その、熱い、魔力が……っ！ 奥に……っ、奥に、注ぎ込まれて……っ！
いっぱい……っ、私の全てが……っ、この人で満たされて、しまう……っ！」

「くっ……っ！ はあ、はあ……っ。まだ……っ、まだ止まらない……っ！ 君が好きだ、セイバー……っ！」

全てが終わった時。俺たちは互いの汗で光る肌を重ねたまま、荒い息を繰り返した。

「……っ、こんなにも……っ、満たされたのは……っ、初めて、です……っ」

「俺もだよ、セイバー。君の中でイけて、最高に気持ちよかった」

「その魔力……っ、私の身体に、残っています。……ふふ、これで、もう、戦場では負けません」

俺は彼女の目尻にキスをし、鼻にキスをし、そして再び、唇に深く口づけを落とした。

「……セイバー、愛している」

「私も……永遠に、剣であり続けます」

エピローグ..騎士王の秘めたる熱

一.惜別の朝、最後の懇願

朝食を済ませ、チエックアウトの時間が迫っていた。



着替えを終え、日常へと戻る直前の、名残惜しい時間。

セイバーは私服に着替え終えていたが、その動きはひどく緩慢だった。

「……」

セイバーが小さな声で、俺を呼んだ。

振り返ると、彼女は旅館の備え付けの椅子に座り、俯いている。

「どうした？ もう行かないと」

「……分かっています。ですが、どうにも……身体が重くて。それに……」

彼女は顔を上げ、潤んだ瞳で俺を見つめた。

「その魔力（ぬくもり）が、もう私の中にないと思うと……戦場に戻るのが、不安でなりません」

「そんなこと言うなよ。昨晚と今朝、たっぷり補給しただろう？」

「あれは……愛の証です。魔力とは別腹なのです」

食いしん坊王らしい理屈に、俺は思わず苦笑した。

「お願いです。もう一度……最後にもう一度だけ。ほんの一瞬で構いませんから、私の不安を拭い去ってください」

そう言って、セイバーは俺に向かって、胸を張って見せた。ブラウスの生地が、豊かな胸の形をくつきりと浮き上がらせている。

「ここが、まだ……その熱を求めて、疼いているのです。……我儘を言って、申し訳ありません。ですが、これが、離れる前の、私の最後の懇願です」

俺の理性は、一瞬で吹き飛んだ。

♪ 焦燥の抱擁、服の軋み



「……分かった。少しだけだぞ」

俺は答えると、彼女を椅子ごと抱き寄せ、そのまま衝動的に、深くキスをした。ちゅぶ、という水音が部屋に響く。

「んんう……っ、……っ！ はあ、甘い……っ」

セイバーは俺の首に腕を回し、身をよじらせる。

俺の手は、ブラウスへと迷いなく侵入した。下着越しに、昨日あれほど熱狂した柔らかな感触が、再び掌に広がる。

「ひあっ！ そこ……っ！ もう、そんなに敏感になってしまっ……っ！」

「服の上からでも、こんなに熱いなんて……君は本当に俺に飢えているな」

「……はい。この指が……っ、私を、思い出すように責めるから……っ！ んんっ！」



俺が乳房を強く揉みしだくと、セイバーの喉の奥から、抑えきれない喘ぎ声が漏れ出す。

「もつと……っ、もつと強く……っ！ この人に壊されるなら……っ、本望です……っ！
くっ……っ！」

ブラウスとスカートの生地が、俺たちの激しい動きに合わせて、ガサガサと軋む音を立てる。

俺は乳首を摘み上げ、指でひねる。

「ああああっ！ だめ……っ、いつて、しまっ……っ！ 立って、いられません……っ！」

セイバーは椅子から滑り落ちるように、俺の膝の上に座り込んできた。

俺の脚の上で、スカートに包まれた彼女の秘所が熱を帯び、強く擦りつけられる。

「あ……っ、ダメです……っ！ 時間が……っ、チェックアウト、があ……っ！」
「あと少しだけ、セイバー」

俺は彼女の服の中に手を滑り込ませ、下着の中に指を潜り込ませた。
指先が触れたのは、すでに愛液でぐっしょりと濡れた、熱い粘膜。

「ひいっ!? あああ……っ！ そこは……っ、今朝、剣が入って、いた……っ！」

指一本で、彼女は再び身体を硬直させた。

俺は彼女の耳元で囁く。

「この熱を、忘れるな。戦場でも、君の核に俺がいることを、思い出せ」

「んんんんっ！ ああ、もち……っ、ろん、です……っ！ 私の……全ては、この人の、もの……っ！」

彼女は快感のあまり絶頂を迎え、俺の肩に顔を埋めた。小さな震えが、全身を駆け巡る。

∞ 永遠の魔力と、帰路の誓い



愛の衝動が収まった後、俺たちは荒い呼吸を整えながら、しばらくそうしていた。服は乱れ、髪は崩れ、顔は紅潮している。だが、互いの瞳に宿る熱は、この上なく純粹だった。

「……満足されましたか、騎士王様」

俺が少し意地悪く言うと、セイバーは頬を膨らませ、不満げに答えた。

「たった五分で、満足などできるはずがありません。ですが……」

彼女は俺の顔に、別れを惜しむような、深い口づけを落とす。

「この熱と、その魔力があれば、私は次の戦いまで、万全の態勢で臨めます。ありがとうございます」



セイバーは立ち上がり、乱れたスカートのシワを丁寧に伸ばした。
そして、いつもの凛とした騎士王の表情に戻り、俺に一礼した。

「さあ、行きましょう。この温泉での思い出は、私の秘めたる魔力として、決して尽きることはありません」

俺は頷き、旅館の扉を開けた。

外は冷たい冬の空気。だが、俺たちの胸の中は、永遠に熱く満たされていた。
最強の剣と、最愛の主。

俺たちの聖杯戦争は、まだ終わらない。

く完く

